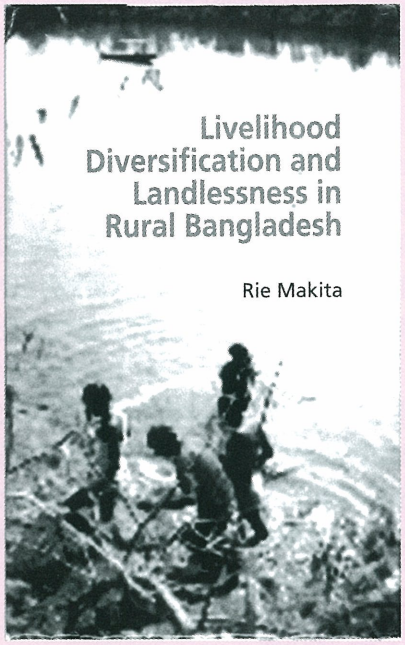
決定

第12回
「国際開発研究 大来賞」

主催：財団法人 国際開発高等教育機構（FASID）

「国際開発研究　大来賞」は、多様化する国際開発のニーズに対応し新たな指針を提示する研究を奨励するため、当財団の初代評議員会会長を務められた大来佐武郎先生を記念して平成9年に創設されました。

第12回の受賞作品が下記の通り決定いたしましたのでご紹介します。



牧田 りえ 著

『Livelihood Diversification and Landlessness in Rural Bangladesh』
（The University Press Limited）

これまでの受賞作品

第１回　廣瀬昌平・若月利之編著『西アフリカ・サバンナの生態環境の修復と農村の再生』農林統計協会　1997年
　　原 洋之介著『開発経済論』岩波書店　1996年
第２回　絵所秀紀著『開発の政治経済学』日本評論社　1997年
　　深川由起子著『韓国・先進国経済論 ―成熟過程のミクロ分析―』日本経済新聞社　1997年
第３回　中兼和津次著『中国経済発展論』有斐閣　1999年
　　辻村英之著『南部アフリカの農村協同組合 ―構造調整政策下における役割と育成―』日本経済評論社　1999年
第４回　峯　陽一著『現代アフリカと開発経済学　市場経済の荒波のなかで』日本評論社　1999年
第５回　黒崎　卓著『開発のミクロ経済学』岩波書店　2001年
　　西川　潤著『人間のための経済学―開発と貧困を考える』岩波書店　2001年
第６回　石井正子著『女性が語るフィリピンのムスリム社会』明石書店　2002年
　　脇村孝平著『飢饉・疫病・植民地統治 ―開発の中の英領インド』名古屋大学出版会　2002年
第７回　平野克己著『図説アフリカ経済』日本評論社　2002年
第８回　石井菜穂子著『長期経済発展の実証分析』日本経済新聞社　2003年
　　安原　毅著『メキシコ経済の金融不安定性』新評論　2003年
第９回　藤田幸一著『バングラデシュ農村開発のなかの階層変動：貧困削減のための基礎研究』京都大学学術出版会　2005年
第10回　谷　正和著『村の暮らしと砒素汚染 ―バングラデシュの農村から』九州大学出版会　2005年
第11回　湖中真哉著『牧畜二重経済の人類学－ケニア・サンブルの民族誌的研究』世界思想社　2006年

牧田 りえ 著
『Livelihood Diversification and Landlessness in Rural Bangladesh』 (The University Press Limited)

審査委員選評

本書は、バングラデッシュの農村における土地無し農民に焦点を当てた実態調査に基づいた研究である。周知のように、従来から多くの低所得国、最貧国では、土地無しに農民＝貧困層の削減に取り組んでおり、その削減戦略としては、マクロ経済成長、人口増の抑制、農地改革、工業化による農村人口の都市への移動、農業生産における規模の拡大、農産物の多様化による生産性の向上が有効であると言われてきた。しかし、これらの戦略も、政治的・経済的・社会的・生態的制約条件に直面して、成果が期待ほどでていないのが現状である。バングラデッシュもこの例外ではなく、相変わらず南アジア地域でも最高の失業率や貧困率を未解決のままできている。

本書の特徴は、総合農村開発研究所（IIRD）というNGOが指導する「パートナシップ企業」による非耕作部門での所得創出事業が、一農村地域における貧困削減効果をいかにもたらしているかを綿密な実態調査に基づいて実証している点にある。本書は、現存する多くの制約条件の下で、単なる政府補助金対策や、政治的構造改革による社会的軋轢・混乱をもたらすことなく、グラミン銀行と同様に、途上国が推進できるもう一つの貧困脱却の道があることを示している。NGOという政府以外の市場プレーヤーによる市場原理に基づいた、経済活動の効率化を通じた支援活動というアプローチは、そのもろもろの限界にも拘らず、財政赤字に直面している多くの途上国の政策担当者にとっても示唆に富み、大きな期待と希望を与えるものであるということができるであろう。特に、単純生産的生業から拡大生産的産業へ（from survival to accumulation）と発展するために農民自身が必要な技能・技術と農村を取り巻く資金、市場、法・行政等の諸条件整備がいかなるものかを明確にしている。実態調査の枠組みと方法が明確であり、フィールド調査が有効に活用されている点も高く評価したい。

しかし、学術的には、本書には厳密な統計分析がなく、経済理論的考察も不足している。さらに、実践面では、パートナーシップ企業という形で参入したNGO自身に相当の運営管理能力や技術的専門性等が求められるが、一般のNGOにはその能力・体制も不備であろうから、はたしてこのアプローチが、多くの途上国で普及できるかどうかも気になる。

しかし、日本人学者が日本人の眼で見た途上国の農村分析を英文で発表・出版し、日本の対外発信強化に資すると同時に、国際的な開発政策議論へ多数の日本人学者が参加することの大切さを常に強調、訴えてこられてきた大来先生の遺志に応えるという意味もあって、本書の推薦を最終的に合意したということを付記したい。

（廣野　良吉　成蹊大学名誉教授）

第12回応募作品の傾向と選考経緯

2007年4月から2008年3月までに出版された開発援助を含む国際開発の分野における課題を主たるテーマとした日本人が執筆した日本語及び英語の研究図書を対象として公募したところ、33件の応募があり、そのうち4件が英語で執筆されたものであった。

作品のテーマは、経済関連（産業・金融等）のものが9件、人類学的手法を用いたものや地域研究が7件、国際協力、国際関係全般を扱ったものが5件、開発援助を様々な視点（社会・経済・都市・農村・教育等）から検証した作品が10件、環境と開発をテーマとした作品が3件であった。また、地域別に見ると本年度もアジアに関する文献が多く見られたが、なかでも中国に関する作品が8件と目立った。

当財団内部で予備審査を行った結果、受賞作品に加え、下記4件が最終審査に残った。

村上 一真著　『環境と開発の政治経済学 — 持続可能な発展と社会的能力』　多賀出版
朽木 昭文著　『アジア産業クラスター論 — フローチャート・アプローチの可能性』　書籍工房早山
島田 周平著　『現代アフリカ農村 — 変化を読む地域研究の試み』　古今書院
高桑 史子著　『スリランカ 海村の民族誌 — 開発・内戦・津波と人々の生活』　明石書店

最終審査で委員から出された意見はおおよそ以下のとおりである。村上氏の作品は、「社会的能力」というとらえどころのない概念を実証可能な形で評価する試みに挑戦しているが、開発援助の世界で注目されているキャパシティ・ディベロップメントの議論なども裨益するのではないかと思われ、開発援助の分野への貢献のインパクトも大きい。朽木氏

の作品は、グローバリゼーションのもとにおける産業政策とは何かについての著者の考えを非常に明確に打ち出している。事例も多く、クラスターを政策的に育成しようという「実践の書」となっている。地域開発にとっても非常に重要であると思われる。島田氏の作品は、特定の学問領域ではなく、文化人類学、地理学、農学等の学際的なアプローチを目指している。長期に渡り、個々人や個人間の人間関係を観察し、それと開発問題とを関連付けて議論している点は、個人の視点で開発を捉えており、興味深い情報も多い。高桑氏の作品は、伝統的な「海村」が行政的な「漁村」となり、水産業振興政策の対象になってからの変化の研究は、開発の原点になっている。働き手の女性を「ジェンダーと開発」という視点からその変化を追っていることも参考になる。

今回の受賞作品、『Livelihood Diversification and Landlessness in Rural Bangladesh』はバングラデシュの土地なし農民に焦点を当て、農民が生存から貯蓄へと生計の多角化を図ることにより貧困削減を実現する理論的枠組みを論じている。また、バングラデシュのみならず開発途上国の農村地域で、養鶏、養魚、養蚕といった耕作農業と並んで重要な生産活動が「生業」から「産業」へと発展するために整備すべき条件も明示していることは、開発援助関係者にとって大いに参考になるであろう。英語で執筆されているという点でも、日本の研究者の成果を広く世界に発信し、また普及する可能性も秘めているといえよう。

受賞者の言葉

微力ながら開発援助に携わってきた者として大変嬉しい賞をいただくことになりました。この著作は2006年に提出した博士論文が基になっていますが、それ以前の実務を通じて得た知見がなければこの研究は不可能だったと思います。これまで様々な現場で私を鍛えてくださったすべての方々に改めて感謝の意を表します。

農業分野の調査で農村に行くと、地方行政官が紹介してくれるのはいつも土地所有者および農業経営者としての農民でした。田畑で汗を流し農作業を実際に行なっている人たちを見て「あの人たちの話を聞けるでしょうか」と切り出すと、「彼らは何も知らないから必要ない」と一蹴されたものです。以来、農業に従事しているのに農業開発から除外される人々、土地なし労働者が気になる存在になりました。一方、バングラデシュを始め、多くの国々で貧困対策としてのマイクロクレジットが普及し、グラミン銀行の創始者がノーベル平和賞を受賞するほど成功しています。それにもかかわらず、どうして貧困層はいつまでも貧しいのだろう。どうすれば彼らは成長する経済に参画できるのだろうか。このような思いが本研究の出発点でした。

研究を行なう上でいくつかの幸運に恵まれましたが、最大の幸運は、バングラデシュの村落に私を導いてくれた非政府組織 Institute of Integrated Rural Development に出会ったことです。お世話になった同スタッフや村の人々にお礼をしたいという気持ちが実を結び、バングラデシュの農村開発に関わる人たちに読んでもらいやすい形での出版が実現しました。そして、今回はこのような素晴らしい賞をいただけることとなり、お世話になった方々に少しだけお返しができたかもしれません。残りは今後の活動を通じてお返しできればと願っております。

最後になりましたが、賞の選考を担当された審査委員および関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。　（牧田 りえ）

著者略歴

牧田りえ　東京都生まれ。1995年コーネル大学修士課程（国際農業・農村開発）修了後、旧海外経済協力基金、（財）国際開発センターに勤務。2006年オーストラリア国立大学より博士号（地理学）を取得。豪州ウーロンゴン大学客員研究員を経て、2008年より東京大学サステイナビリティ学連携研究機構の特任研究員としてインド・エネルギー資源研究所へ派遣される。

主要著書　"The visibility of women's work for poverty reduction : Implications from non-crop agricultural income-generating programs in Bangladesh", Agriculture and Human Values, online first (Springer). 2008年（印刷媒体は2009年）

"Exploring partnership enterprise for the rural poor through an experimental poultry program in Bangladesh", Journal of Developmental Entrepreneurship, 12 (2) : 217–237. 2007年

"Changing patron-client relations favourable to new opportunities for landless labourers in rural Bangladesh", Journal of South Asian Development, 2 (2) : 255–277. 2007年

「開発のための調査」（山本一巳・山形辰史 編）『国際協力の現場から —開発にたずさわる若き専門家たち—』岩波書店、2007年

「停滞産業と成長産業をつなぐバングラデッシュNGOの試み —貧困層の経済機会としての養蚕業—」『国際開発研究』（15）2：101–118、2006年

表彰式および記念講演会

表彰式及び記念講演会
日　　時　2008年12月25日（金）午後3時から
場　　所　財団法人国際開発高等教育機構　4Fセミナールーム
参 加 費　無料
申し込み　お名前、ご所属先名、電話番号、E-mailを添えて下記お問合せ先までご連絡ください。

FASID

審査委員会

●審査委員長●
川上 隆朗　FASID理事長

●審査委員●
浅沼 信爾（一橋大学国際・公共政策大学院客員教授）、荒木 光弥（国際開発ジャーナル社代表取締役）、
大来 洋一（政策研究大学院大学教授）、河野 善彦（笹川平和財団顧問）、
廣野 良吉（成蹊大学名誉教授）、角﨑 利夫（FASID専務理事）、
大塚 啓二郎（FASID連携大学院プログラムディレクター）、
湊 直信（FASID国際開発研究センター所長代行）

●お問い合わせ先●

FASID
（財）国際開発高等教育機構　国際開発研究センター　林／簑原
〒102-0074　東京都千代田区九段南1-6-17　千代田会館5階
TEL：03-5226-0306　FAX：03-5226-0023　URL http://www.fasid.or.jp　E-mail:okita2008@fasid.or.jp